

がんは日本人の死因の1位だが、新たな治療法の登場、広がりなどによって生存率は向上している。最近、がんの発症に最も重要なタンパク質「Ras（ラス）」の異常を阻害する新薬が登場。山梨県立中央病院を運営する県立病

やまなし 医療最前線
研究から臨床へ
県立中央病院から
(266)

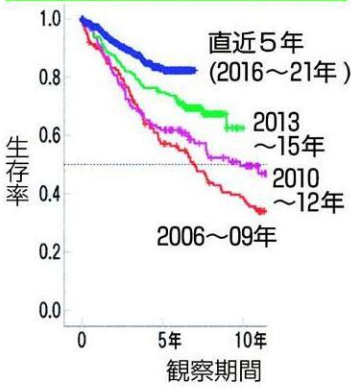


小俣政男理事長

院機構の小俣政男理事長は「がん治療にとって新たな展開」と強調する。「今、がんになったとして」小俣理事長はそう仮定した上で「医師から伝えられる生存

山梨県立中央病院 肺がんと膵臓がんの生存率

肺がん(ステージ1)の生存率。手術・薬剤などの進歩で年々改善



膵臓がん(ステージ4)の生存率。予後の改善が進んでいない



Ras 異常阻害薬が登場
がん治療 新たな展開へ

率は過去のデータ。実際は年々改善してきている領域が多い。006年からがん患者のデータを蓄積。その数は約2万9千に上る。例えば肺がん。早期に発見され、症状が進んでいない。山梨中央病院は県がん診療連携拠点病院に指定され、2

※山梨県立中央病院がん登録データを基に作成
*Tada M /Omata M Gastroenterology 1991年;100:233-238

一方、データ全体をふかんとすると、あまり変化が見られない臓器もあるという。その代表的なものが進行した膵臓がんで、特にステージ4では予後の改善が進んでいない。小俣理事長が打開に向けた鍵と捉えているのがRasの異常を阻害する薬だ。Rasは細胞の増殖に関わるタンパク質の一つ。Rasを作り出す遺伝子に突然変異が起きると、Rasは他のタンパク質とくっつき、細胞をがん化させる信号を伝達するようになる。

原因の25%程度、膵臓がんだけで見れば95%を占めている」と小俣理事長。遺伝子変異を調べ、効果が期待できる薬を投与する「がんゲノム医療」の本丸とも言えるが、その構造上、何十年にもわたって創薬は難航していたという。立体的な研究が続けられる中で22年、一部のRas遺伝子を阻害する分子標的薬「ソトラシブ」が登場し、同院も同年6月に導入した。小俣理事長は「今は一定の条件を満たした肺がんに限定されているが、これが突破口となり難治の膵臓がんへの利用が期待され、希望の光になる」と話す。

世界中で行われている研究が実際の治療の現場で生かされ、医療は進歩する。実を結んだ最新の事例を県立中央病院の医師に聞く。